

「九月二日から九月」

人間科学科2年 岡本 悠希

徒然なるままに 日暮し パソコンに向ひて
心に移り行く よしなし事を そこはかとな
書きつくれば あやしうこそ 物狂ほしけれ

九月一日

「脳に異常があるかもしれません。」

夏休みも半分を過ぎた頃、ちょうど帰省していた私は体の異常を感じ、M大学の付属病院を訪れた。検査のため緊急入院の手続きが取られ、即日入院となった。

九月二日

空いていた隣のベッドに新しい患者が運ばれてきた。年齢がかなり離れていたこともあり、あいさつ以外に言葉を交わすことはなかった。検査だけが淡々と進み、看護婦さんとの短い会

話のほかには人との関わりもなく、不安だけが大きくなっていった。

九月三日

朝から絶食して様々な検査を受ける。髄液検査という腰から針を通して体液を採取するものから、MRIという画像を撮影するものなど時間のかかるものが多くて大変だった。体のバランスがかなり悪くなっており、看護婦さんの支えを受けながら検査室と病室を行き来した。

九月四日

検査結果が出て、担当の医者に呼ばれ、いくつかの病名が考えられると告げられた。入院を続けなければならぬことが確定し、ステロイドという薬品を使ったパルス療法というものが行われることになった。

九月五日

朝から腕に直接点滴の器具が取り付けられ、常時、針を刺したままの状態になる。風呂もビールを巻いて入るといふことなので面倒くさそう。二時間ほどの点滴と食事以外、何も無い生活になる。

九月六日

病室が移されることになった。こんどは四人部屋だそう。

新しい病室に入ると、毛布を深くかぶった長身の男が寝ていた。大きな火傷の傷と深いグリーンの毛布の色がまいて近寄りたたい雰囲気を感じていた。窓際の部分に僕のベッドが置かれていた。ここでまた点滴と食事だけの生活が続くと思うと暗い気持ちになった。実際、暗い気持ちになる理由は他にもある。考えられる病名がいくつも告げられたものの、どれが本当の病名なのか、医者の間でもはっきりと判らなかつたのだ。画像の所見だけでは、手足が動かなくなつてもおかしくないと言われたこともショックだった。この先、大学に戻れるのだろうか？社会に出て仕事をできるまでに快復できる

のだろうか？今後の検査に関する同意書にサインをしながら、答えのない心配事ばかりが頭を駆け巡った。

一人になり、空を見る。昨日までは普通の学生だと思っていた。将来に対しては、少し不真面目だったけれど。いまは病人だ。もう普通とはいえないかもしれない。気がつくとも涙が流れていた。僕の前には膨大な時が流れていて、それを前に自分の力を振り絞って戦っていく。それが人生だと思っていたのに、今そのための武器すらなくなろうとしている。親に面倒をかける生活を想像しただけで沸き起こる絶望に心が支配されていくのがわかった。

点滴と食事だけの生活が何日か続き、精神的にも疲労が溜まっていた。ステロイドという薬品はとても強力で、僕の場合、点滴で一度に打ち込む量は日常生活で使われる通常のステロイド錠剤のおよそ数十倍の濃度だった。副作用による不眠状態も精神をすり減らす一因となった。精神的に苦しかったことが僕の恥ずかしさという堤防を打ち壊したのか、それとも誰かと話したいという思い、日常への本能的欲求がそうさせたのか、気がつくとも僕は病室の隣人に恋

愛相談をしていた。恋愛といっても男子校出身の僕に恋愛経験などなく、「人を好きになるってどういうこと？」などという馬鹿げた修学旅行的トークを繰り返していたのだが、その人は僕の話に真摯に答えてくれた。

隣にいた男性は、石山連という二九歳の男性で患者者だった。でもそれを感じさせない明るさでいろいろな話をした。病気のこと。それが原因でやめざるを得なかった仕事のこと。学生の頃のこと。銀座に仲間と開いたというバーの話。驚いたことに彼は、学生生活を僕と同じ横浜で送っていた。僕よりも横浜やみなとみらいなどの街に詳しく、面白い通りや店を教えてください。また石山さんと話すようになってからは、少しずつ病氣と向き合う気持ちが出てきたり、まだそんなに悲観しなくていいのだということも学んだ。一時は余命宣告もされていたこともあった人の話を聞いたシヨックが大きすぎて逆に精神的にも落ち着いてきたし、彼も同じようにステロイドを飲んでいただけでもあって、その副作用で眠れない僕らは、朝まで語り明かしたりもした。癌になり、東京から実家のある京都の病院にきたことで、多くのものを「仕事も生活の場も、そしておそらく恋人も」無くし

てきた石山さんの言う「いろいろやって失敗した方がいいよ」という言葉は胸に響くものがあった。

石山さんと話すようになった頃から、少しずつ病室の空気も明るくなり、僕は他の入院患者の人たちとも話すようになってきた。僕はとりわけ社交的というわけでもないのだが、幼いころから初対面でも気軽に話しかけられるという特技を持っていた。一番怖かった毛布の長身男性は中島涼という三〇歳の男性で、いつの間にか、僕らは三人でよく話すようになっていた。トークのテーマは《恋愛》だったのだが、基本的には僕に対するアドバイスが中心になった。そのころの僕は、ロン毛でファッションセンスはゼロ。おまけに生まれて初めての告白で大失態？（あまりの酷さに自分でその記憶を消してしまったみたいだ）を演じてしまったばかりだったので、二人の話を変な宗教団体の信者のように聞き入っていたのである。正直情けないという思いもあるが、まだ二十歳だし大丈夫はずだ。たまたまM大医学部の五回生が実習で患者の病室周りをしている時に聞いたのだが、医学部で男子高出身の男の多くが「年齢」「彼

女いない歴」らしい。例の二人は経験豊富らしいが、そんな僕の知ったことではない。こういう話を始めると、さっきまでの深刻さはどこ吹く風とでもいう感じで「君たちは病院で何をしているのだ」と言われかねないが仕方ない。病氣の話や仕事の話は暗くなるのが目に見えるから、せめてあまり関わりのない話で興味のあるものに絞った結果、こうなったのだ。

そんな話をしていると、僕の服装や髪形があまりにひどいという話が良く出てくるようになった。そこで提唱されたのが《池元祐太改造計画》。つまりは新しい僕をプロデュースするということだ。まあ改造といっても特別何か教えるを受けてすぐにレベルアップなんてことはできないし、病人三人が集まって何かが起こるなんてことはなく、缶コーヒーを飲みながら好きなタイプの看護婦さんの話をしたり、くだらないことをやっていた。ただもつとコミュニケーションを積極的にとるのが大切なことや居酒屋などのバイトだといろいろなタイプの知り合いを作るのに有効だということ言われた。よく考えてみれば三十路近い大人二人が二十歳の学生にレクチャーしているという図もなかなか新鮮

でもある。でも笑わないでもらいたい。実は入院中にK大学の友人の一人で大学ではもう彼女を作れないだろうと言っていたやつにまさかの恋人ができたのだ。さすがに今のところは好きな人もいないのに恋人はつくれないが、見た目ぐらいいま少し何とかしたいと思ひ、あれこれ言いながらファッション誌をめくったりしつつ日々を送っていた。

しかしそんな楽しかった日々にも終わりがきてしまった。石山さんが退院したのだ。喜ばしいことだとは思いつつ、少しずつ人がいなくなっていくという病院の現実を今更ながら思ひ出したりした。別れ際に、僕は石山さんの言っていた「男にはユーモアが必要だよ」という言葉を実践しようと、ピンク色のバラの花束を渡した。スキンヘッドの頭にピンクのバラを持つ彼は、眼だけが笑っている看護師たちに見送られながらタクシーに乗り込み、あつという間に去っていった。「御免なさい石山さん。ちょっとやりすぎました？でも最後の笑顔が若干引きつけていたことを僕は気にしません」石山さんと看護師さんの反応は置いておいて石山さんの母親にはかなり喜ばれ、同室の患者に配られた梨が、僕だけ四つほど多かったのは、ほかの皆に

は内緒である。僕はいつも年配の方にはもてるのである。

石山さんが退院し、病室に静けさが戻ってきた。正直云うと、かなりさびしくなってしまうのである。中島さんは隣室のおばさんと、こっそり煙草を吸いに出かけるようになっていた。何度か誘われたが、煙草は吸わないので行かなかつた。その頃から、また僕の体の検査が始まった。治療の結果がどう出ているのかを診るためだ。自分としては、症状も軽くなっていることもあり、かなり樂觀視していた。しかしそれらの希望はあっけなく崩された。画像によると、頭の炎症が全く小さくなっていなかったのである。両親が呼ばれ、五つほどの病名が挙げられた。最悪の場合は難病指定のものになるという。二度目の大きな絶望が僕を覆った。人生なんて一人一人違うのだからどうなるかなんてわからない。一年間に三万人以上も交通事故で死ぬ人がいるのだから、まだ自分なんてマシなもんだ。そう自分に言い聞かせて、教えてもらったポジティブシンキングで持ち直そうとしたが、一瞬で死ぬのと病気を抱えて生きていくことの意味の違いに気がつくつと、またふ

さぎ込んだ。そこで入院も苦手な勉強克服の機会だと思い、英語の学習を始めると何かから逃れようとするかのように没頭した。だがドリルの点数はなかなか上がらない。何せ英語は一番の苦手科目なのだ。

暗くなってしまった僕を再び引き上げてくれたのは、新しく同じ病棟に入ってきた高校生だった。僕の知り合ってきたタイプの人とは、ほぼ一八〇度異なり、「てゆくか」や「ちょくやばくなくい」の京都版といった感じの女の子だ。丸川由美という一八歳の、その少女はかなり明るいタイプで、歯に衣着せない言葉のナイフで僕の心をずたずたに突き刺した。「あゝ、その服ダメ。キシヨイからこっちのチェックを7分にまくりな！」（注：僕の方が二才も年上なのに当たり前のようにタメ語です。それを指摘したら、「小さい男やな」と言われたので、それ以上言及しませんでした。僕は小さい男でも彼女が怖くて引いたのでもありませんよ。心の広いジェントルマンなのです。）そんなこんなで停滞していた《池元祐太改造計画》は急ピッチで進められることになった。

ここは京都。大阪ではありません。しかしど

うしてもこの人たちといると、ここが本当の京都という気がしない。大阪生まれの僕が大阪の空気をここで感じてしまっているのだ。

それにしても僕は今日も相変わらず、皆の前でファッションショーを繰り返している。丸川さんの「眉毛は絶対に剃った方がいい」という言葉に、すかさず中島さんのたばこ仲間である初風さんがやりとりしながら剃刀を取りに行った。（彼女は初風里子、アラフォーで、僕らのボスの存在です。）さすがにこれは参りました。当の丸川さんは眉毛をほとんどそって残っていないのです。女性ならともかく、男でアレをやっているのは首都高の暴走族だけ。すかさずトイレに行くといって談話室を抜け出した。かつてある人が戦略的撤退という言葉を残した。あれはある意味、究極の戦略ではないだろうか。敵と味方の非難の目を隊長一人が背負うのだから並みの精神力ではできません。僕もそれに不慣れなりました。ちなみに僕の精神力というと、中島さんにそそのかされ丸川さんのことを今朝から由美ちゃんと呼んでいるくらいです。

初風さんたちと話すようになってからは、病院敷地内の散歩が日課となった。さすがに四人

がぞろぞろと歩いていると振り返る人もいる。

大病院の教授回診は教授の後に医師たちが続きますが、僕たちは患者行進として初風さんの後を付いて行きます。主な業務は散歩とそのついでに敷地を少し出た先で煙草を吸うこと。患者は喫煙が禁止されていて、以前病室でこっそり吸っていた人が強制退院させられていたのを見たこともあった。中島さんは既にイエローカードをもらっていて、煙草の値上がりこともあり、今の手持ちがなくなったらやめると言っていた。一週間後になぜ新しいカートンが中島さんの鞆からのぞいていたのかは謎だが、おそらく鞆が煙草臭くなりすぎて勝手に生えてきたのだろう。鞆からカートンが生えなくなること祈っています。

散歩の締めは地下階にあるローソンでおやつを食べることだ。僕はステロイドを飲んでいて血糖などが上がりやすいので0カロリーのゼリーを食べるが、初風さんと丸川さんはコロッケやシュークリームを食べている。一度だけ「三千歩歩いても消費できるのは百カロリーにも満たないから、このパン一つで一万歩は歩かないやね」とやさしく言ったところ、彼女にはどうしてもこの計算が納得いかないらしく、物凄

形相で僕を睨んだ後、何事もなかったかのようにパンを平らげながら、ある話をしてくれた。「もし明日、世界が減ぶとする。コロケが食べたいが、食べたらずらしてしまう。でも明日には世界がないから、もう食べられない。ならば食べた方がいいに決まっているでしょ」と彼女は言った。確かにいい話である。病気で危険な状態にある僕らにとっても大切な問題である。でも人は将来をあるものと仮定しなければ生きていけないものなのではないだろうか。そんなことを言おうとしている間に彼女は席を立ってゴミを捨てにいった。食べたいから食べるというわりには、彼女のスタイルは悪くない。性格もサバサバしていて言いたいことを言うし、友人にしたいタイプの人間だ。そんなところに男は惚れるのだろうか？もし彼女がもう少し大人しい性格であったら僕も惚れてしまったかもしれない。しかし初対面から続いている恐怖のファッションショーをくぐりぬけてきた僕には、惚れるのホの字もなかった。また明日もショーはあるし、このメンバートと長くいると、僕に対して時折とても楽しいことを思いついてしまうので、足の毛を剃られないうちに自分のベッドに戻って勉強を始めた。

先日、退院した石山さんが久しぶりにN病棟に来ることとなった。彼の場合は一生投薬治療を続けるので週に一度くらいM大病院まで来るのだが、ついでに入院病棟の僕らの部屋にも寄ってくるようになったのだ。その日、午前に検査があった僕は、お昼の時間になる頃に楽しみに病室にもどった。病室には中島さんと石山さんがいて、なぜか隣に看護婦さんがいた。彼女はにっこりと笑うと「池元君、二日前からお腹下してるでしょう。」確かに結構大変な状態だが、整腸剤ももらっているはずなのにわざわざ訪ねるのは何故かと聞くと「個室に隔離します」とだけ告げられた。石山さんと会ってわずか三十秒。「また今度」という一言だけ交わして僕らは別れた。下痢についての検査の結果は、異常がなかったので、個室からは三日で解放された。「娑婆の空気はうまいぜ〜」などと三日も拘束されて頭でもいかれていたのか、そんな言葉を口ずさみながら元の病室に戻ると、いつもの四人がいた。なぜかこっちを見て笑っているの理由を聞くと、個室のドア窓はマジックミラーのため、内側から外は見えないが、外からはすべて見えていて、カーテンを閉めて

いなかった僕の行動はすべて丸わかりだったということだ。もはや動物園ではないか！丸川さんには、「アンタの存在自体が面白い」と言われてしまった。「オマエの口調の方が十倍面白いぜ」と言ってやろうと思ったが、やめておいた。もちろん怖かったのではない。僕はジェントルマンだからね。

隔離事件から数日、僕のあだ名はずばり（カクリ）だった。待遇改善ではないけれど、もっとしつかりしたい名前を求めると（ロンゲ）はどうかと聞かれた。それも嫌だと言ったら（イケモト）に戻った。安心すると同時に高校時代の恐怖を思い出した。高校一年生の頃、同じクラスメイトにイケモトが三人、ユウタが二人がいるという事態に遭遇した。呼び名を決めようと、じゃんけんした結果、負け越した僕は、イケモトとユウタの両方の名を失い、三年間、僕のあだ名は（Y）だった。映画「メン・イン・ブラック」に出てきたアメリカの秘密組織っぽくていいって？まあ、日本人にも関わらず、町中でも学校でも（Y）と呼ばれるのは、なかなかイカシテルかもしれない。

名前も元に戻してもらい、心機一転した頃、

また面白い人が入ってきた。森倉大和、三十二歳。この人は多発性硬化症という病気を持っていて、僕と同じ脳の障害だった。後に、イジリの森倉と病棟で名を馳せ、イジラレの池元と対的存在として、ライバルであり、友となった。十二歳差の友情はおいておくとして、彼の絶妙なイジリトークで僕のロン毛と心は深いダメージを負ったのだ。切るか切らないか。To cut or not to cut, that is the question.

話は変わるが、森倉さんの奥さん曰く、森倉家には四人の子どもがいる。女の子二人と男の子一人、そして手のかかる夫一人。そこに四人目の僕が入ろうとしている。いつも娘に三つ編みを編んでいる彼女は昔、美容師を志していた。ヘアスタイルを相談して、何かできないか聞いてみるとスパイラルツイストというのがあるという。細い三つ編みを何本も作り、それを数時間置いておいた後、ほどくと擬似パーマが出来上がる。僕はそれを試してみたくなり、奥さんが面会に来られた時にお願いくることにした。「ずいぶんと手のかかる大きな子供ができたものだよ。」と奥さんは髪を編み始める。しかし僕の髪質は、それを容易にさせはしない。「赤ちゃんのような毛ね」と言われてしまっ

た。さらに猫毛でもあるため、結んでもゴムが取れてしまったりした。それでも一時間ほどかけて完成した髪形は、僕をストリート系の男にした。中島さんにパーカーや数珠のような首飾りを貸してもらい、病棟を闊歩した。担当医に少し睨まれたが気にしない。今日から僕はストリート系だ！廊下で丸川さんたちに出会った。「似合うじゃん」と言われる。少し嬉しい。しかしそのあとに「でもなんか軟弱。絡まれそう」と付け足された。僕のストリートデビューはまだまだ先らしい。

退院予定を一週間後ぐらいに控えたころ、また新しい人が隣の病室に入ってきた。二週間ほど点滴治療のため入院するという事で短い付き合いになりそうだ。新しく入ってきた彼女、山本彩は医大の五回生だった。丸川さんとは全く異なるタイプだが、仲良くやっている。最初は遠慮がちに入ってきていた彼女を見て「ああ、これがフツーじゃ」などと和んでいたのも束の間。我が永遠のライバル森倉が、ズバリ聞いてしまったのだ。「ところでロン毛ってどう思う？」「やめろ〜」僕はそう叫ぼうとした。しかし、時すでに遅しで、彼女は一言、シヨットガンのような言葉を僕に撃ち放った。「ない

ですね」「うー、シヨック！」と机に覆いかぶさった僕に、丸川さんは「情けないな」と笑いながら言う。「俺はガラスのハートの持ち主なんだ」と返すが、みんな笑いが止まらない。黒髪で年上の女性というオーラを持った彼女は魅力的だったが、僕の思いはロン毛に阻まれてしまったようだ。ちなみに森倉さんの奥さんが髪を編んでくれた際に言っていたことだが、森倉さん自身もかつてロン毛の時期があったそうだが、まったく似合っていなかったらしい。ヒゲなしのロン毛はなかなか難しいようだ。

新しい仲間が加わり六人になった行列は、病棟の名物のようになっていた。夜はみんなでお菓子を持ち寄って馬鹿な話をしていたし、僕のファッションショーもなかなかのものになってきた。しかし実は、別れの時間が差し迫っていることも感じていた。ある日の朝、早めに起きてしまった僕が病室を出て談話室に行くと、初風さんがコーヒを飲んでいた。「そろそろみんな退院ですね」と言うと、少し笑って「病院だからね」と返された。初風さんは再発性の病気を抱っていて、僕よりずっと長い期間入院していた。おそらくこういう別れもたくさん経験

してきたことだろう。病院は職業や年齢に関係なく、いろいろな人が交わる場でもある。初風さんは僕に「普段出会うことのない、いろいろな人と話すことで自分を広げなさい」と何処かのお師匠さんのように言った。ここではいろいろな人に出会った。大学を出て、就職するのは当たり前のことだと思っていたが、一八歳から働いている人や親の会社を継がなくてはならないお坊ちゃんもいた。皆いろいろな生き方や信念があり、初風さんは多くの人たちと触れることの大切さを伝えようとしてくれたのだと思う。

退院の日、皆に見送られながら病棟を出た。タクシーに乗り込もうとする直前に、ケータイにメールが一つ。中島さんから。「自分の進むと決めた道に自信を持ちなさい。自信さえあれば、たいいていのことは押し切れる。あと、揚げ物は火傷が怖いから、よく注意するように。」まだ石山さんが病室にいたころ、中島さんにこれからのことを聞いたことがある。彼はIT技術を応用した新しいタイプの起業を考えていた。火傷で両腕の皮膚がなくなり、まともな仕事ができないだろうという絶望のなか、五年の歳月を苦しみながらも勉強し続けていた。「方

向を決めたら、あとは走り続けろ！」そんな言葉が胸に僕はケータイを閉じ、タクシーに乗り込んだ。

病院での出来事、人間関係は何物にも代えられない大切なものになった。この一ヶ月半は自分の人生においても大きな意味を持つだろう。楽しすぎて、病気のことでも将来の不安も忘れてしまうこともあったけれど。でもみんな、実は知っている。あの時、病室で出来た仲間の多くはそれほど長くは生きられないかもしれないことを。日常に戻った時に、一生をかけて自分の病気と付き合うという現実に立たされることを。「退院おめでとう」という言葉とともにやがて途切れていく儂い関係性を。だからこそ、この一ヶ月半の記憶は、淡々と日記のように締め括りたい。未来への、希望のスタートとして。

十月八日

午前十時、退院。来週には大学に戻るだろう。